

私達は普段、晩夏の夕暮れの蝸（ひぐらし）の音、秋のスズムシの音、小川のせせらぎの音などの自然音に情動が惹起されますが、実はこれらは世界でもまれな感性であることがわかっています。（ポリネシアを除く）

外国の人はほぼ例外なく、自然音を雑音として右脳で処理するため意味のあるものとして認識されず、記憶に残らないため情動が惹起されません。

これに対して、日本人は自然音を言語脳である左脳でとらえることで、自然音を意味のあるものとして認識、記憶し、情動を惹起するスイッチが入るようになっていきます。

縄文の古来から、四季の変化を五感で感じ、自然と協調して生きてきたなごりなのかもしれません。

この自然に対する豊かな感受性は、言語と一体で、古来から表現の豊かな大和言葉ができ、わび、さびの観念が生まれました。

これを記録し、共有する為にまず、全く異なった言語である中国語の漢字を導入しましたが、大和言葉にはしっくりしませんでした。日本の歴史で唯一、貴族が支配した平安時代になってから、ひらがな、カタカナが開発され、大和言葉の多彩な表現が可能となり、日本人のアイデンティティが確立されることとなります。（貴族文化は武士の台頭とともに南北朝時代までに消滅します）

普通、どの民族も文字は1種類の記号で表されますが、日本人の感性を的確に表現するためには、漢字、ひらがな、カタカナの3種類を必要としました。

「古池や蛙飛び込む水の音」の歌の感性は、日本人には理解できるものですが、外国の人には翻訳されても理解は困難なものといわれます。

ただ、豊かな感性は長所と考えられますが、欠点もあることを認識しておく必要があります。

日本人の弱点として冷静な議論に弱いことがあげられます。一般に議論をする時には左脳の分析能力が大きく働きますが、感情や情動のスイッチも左脳にあるため情動を伴いやすく、相手を嫌ってしまう傾向があります。

今後日本人は、今までより国際化していくと思われませんが、このような自分たちの特性を認識しておくことは大切なことと思われま



最古のいろは歌

平安末期から鎌倉初期の貴族の子供の手習いといわれています。

#### 平安時代

遣唐使を廃止し、現在に続く日本の文化が始まった時代です。寝殿造りという、自然と一体化した家屋様式、着物の原形となる小袖の始まり、文学の始まり、畳の始まり、書道の確立、能の原形となる田楽の始まり、日本刀様式の確立、鳥獣戯画など大和絵の確立。武士の発生、末期には現代につながる貨幣経済の本格的な導入がありました。